

21 瑞鳳扇 御木本幸吉 一点

真珠、綴錦、金
総高(台共)六〇・五 巾三〇・七
昭和三年(一九二八)





背面

真珠で飾り立てられたこの長柄の団扇は、昭和三年（一九二八）の大札に際して、三重県より献上されたもので、制作者は同県鳥羽町で真珠の養殖を世界で初めて完成させ、真珠王と呼ばれた御木本幸吉（一八五八～一九五四）である。

金の縁に真珠を連ね、表と裏にそれぞれ瑞雲に鳳凰を表した綴錦を張り、鳳凰の文様の上にも大小の真珠を留め付けており、その総数は一六〇〇以上に及ぶ。金の長柄や上部の桐文に細やかな彫金が施されている。『昭和大札三重県行幸啓記』（三重県、昭和六年）によれば本品の形は法隆寺に伝わる童形の聖徳太子が手に持つ団扇などを参考とし、鳳凰の模様は正倉院宝物七絃琴の金銀平脱の模様になったという。朱塗りの鳥居形の台に立てられているのは、同県が伊勢神宮の御在地にちなんでのことである。

御木本幸吉が半円真珠の養殖に初めて成功したのは明治二十六年（一八九三）のこと。明治三十八年に伊勢神宮へ行幸された明治天皇に拝謁の折り、真円真珠の養殖の完成を確信していた幸吉は「世界中の女性を真珠で飾ってごらんに入れます」と申し上げたという。明治四〇年の東京勸業博覧会には、真珠で飾られた軍配扇を制作して出品、この後、真珠を用いて表した五重塔の置物などを万国博覧会に出品して話題を呼んだ。また、宝飾の細工場を設置してその技術を高めるとともに、デザイン研究を深め、大正期以降、それまでヨーロッパ製の宝飾品を用いていた女性皇族方のティアアラなどの装身具を手がけるようになり、現在のミキモトの礎を築いた。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

珍品ものがたり

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 58

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 横溝廣子
発行 宮内庁
平成二十四年七月二十一日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections